



ある。点数の多いものとしては、「奉」「子（写?）」「山田」「荒」「井」「丈」「王」などがある。この他、「品遅」「郡」「坂合」「大神」「奥（興）代」「丈部田（?）」などが注目される。刻書には、「大」「×」「川」などがある。

8 木簡の釈文・内容

(1) □五日田主大伴部廣

(132)×(24)×4 881

上下端とも欠損し、全体的に腐蝕しているため原形は不明である。なお、木簡の釈読については、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

（財）山形県埋蔵文化財センター『三条遺跡第三次調査説明資料』

（一九九六年）

（水戸弘美）

山形・上高田遺跡

所在地 山形県飽海郡遊佐町大字富岡字上家ノ前

調査期間 第三次調査 一九九七年（平9）五月～七月

発掘機関 （財）山形県埋蔵文化財センター
調査担当者 斎藤 健・飯塚 稔

遺跡の種類 集落跡・河道跡

遺跡の年代 平安時代・中世

遺跡及び木簡出土遺構の概要

上高田遺跡は、山形県の北西部、秋田県境に近い遊佐町に所在し、古代出羽国府擬定地である城輪柵跡の北約6kmに位置する。周辺は

月光川、庄内高瀬川などにより形成された冲積平野で、遺跡は自然堤防上の微高地に立地している。



上高田遺跡の調査は、これまでに一九九四年に圍場整備事業関連による第一次調査が、一九九六年に国道三四五号改築工事による第

二次調査が実施されている。両調査で、幅131~15m深さ1mに

及ぶ河川跡が検出され、九~一〇世紀のものとみられる須恵器・赤焼土器・黒色土器や、木製品が大量に出土した。特に第二次調査では木簡五点、人形四点、赤焼土器の甕に四面の人面が描かれた人面

墨描土器一点の他、墨書土器も大量に出土している（本誌第一九号）。

今回の第三次調査では、河川跡が二本検出された。このうちの一

本は、以前の調査で検出した河川跡SG-130〇の続き部分で、もう一本は短期間の流路変動により形成されたものとみられる河川跡 SG-13〇一である。

木簡は、SG-13〇〇から一二点出土した。このうち一二点は卒塔婆である。（1）は河床から出土した。一方、（2）~（13）の卒塔婆は、堆積層の最上部、須恵器や赤焼土器の破片によつて獸骨とみられる骨片を覆うように埋納したピットの周辺から、中世陶磁器や水晶球とともに出土した。

今回検出したSG-13〇〇河川跡は、中心部が調査区から外れているため、遺物の出土は前回ほどではなかつたが、木簡の他に、第一次・二次調査で出土したものと同時期の土器、木製品が出土している。また、「印削連」「印」「穂積人」などの墨書土器も出土した。SG-13〇一河川跡は、洪水などによる一時的な流路変動に伴うものとみられ、河床まで浅く、出土遺物も細片のみである。

8 木簡の釈文・内容

×守マ_{子カ} 高向長万口

(256)×11×4 019

「口 佛」

(226)×23×2 061

南無大日如來

(157)×26×2 061

□ □

(141)×(16)×2 061

□ □

(120)×25×2 061

〔南無大口〕

(97)×23×1 061

□ □ □

(65)×27×2 061

×來

(80)×25×3 061

□ □

(93)×23×3 061

□ □

(85)×20×2 061

□ □

(34)×10×2 061

□ □

(58)×(23)×2 061

□ □

(82)×14×2 061

1997年出土の木簡



(1)
関係文献
告書』（一九九八年）
（斎藤 健）

(1)は上部が欠損し、ほぼ中央で折れている。
(2)～(13)は卒塔婆の断片である。(2)の一文字めは梵字の可能性が高い。
(3)は二ヵ所に刃物で切れ目が入れられ、裏側から折られている。上部は欠損。(4)は上部及び右半が欠損。(5)は上部欠損。(6)(7)は下半部が欠損。(8)は上半部が刃物で切断されている。(9)は下半部欠損。(10)は上半部欠損。(11)は上半部が刃物で切り目を入れ折られている。(12)は上半部と右半が欠損。(13)は上半部が裏側に切れ目を入れ折られている。

なお、木簡の釈讀については、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

